

〔城西人文研究第18巻第1号〕

〔研究ノート〕

井泉水編『一茶俳句集』入集の句 (完)

黄 色 瑞 華

凡 例

- 一 一行めに、井泉水編『一茶俳句集』の本文をおく。ただし、漢字は現行文字とし、ルビは省略した。
- 二 二行めに、出典を示し、句帳・紀行などは（ ）内にそれが記されている条の年月を示した。年号は改元の月日にかかわらず元年一月からとした。
- 三 原本と表記が異なるものは、出典の次の㊦に原本のそれを示した。
- 四 注は、「前書」の異同と、他書との異同を示すにとどめた。
- 五 原典は、主として一茶全集本により、『浅黄空』などは一茶叢書本その他によった。また、『八番日記』は風間本により、特に異同がある場合、梅塵本と対照した。

冬 (承前)

年の市

月さすや年の市日の待乳山 (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・12)

古曆

㊦ 座五「^(待乳)乳待山」。

数の日の無きずに仕廻ふ曆哉 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・11)

㊦ 中七「無キズに仕廻ふ」。真蹟、中七「一とせを」。

松立

門松の立初しより夜の雨 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・12)

節分

けふからは正月分ぞ麦の色 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・12)・おらが春・発句鈔追加・文政二年十二月二十四日付文路あて書簡

㊦ 八番日記、前書「セツブン」。中七「正月分ぞ」。おらが春、上五「けふからハ」。「廿一日節分」と前書して「一声に此世の鬼ハ逃るよな」とともに収む。発句鈔追加、「二十一日節分」と前書して、中七以下「正月分ぞ寝よ子供」に添えて「けふからは正月分ぞ麦の色」と傍書。

鬼やらひ

かくれ家や齒のない口で福は内 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・1)

㊦ 志多良、前書「四日節分」。中七「齒のない福で」。句稿消息、「齒のない声で」。中七以下(別案)、「齒のない声で鬼は外」(成美の評に「是は先頃のニアリ福は内ノ方よろしく覚候」とある)。自筆句集、中七以下「齒のない声で福はうち」。「節分」と前書した五句中の第三句。

豆蒔や鼠の分ンも一つかみ (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・11)

⑧ 中七「鼠」の「の」分ンも」。

年とる
としとりに鶴も下りたる鳥哉 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・11)

⑨ 前書「三三三風沢中孚九々」。中七「鶴も下たる」。

住吉の隅にとしよる鷗哉 (文化五年)

としとるや竹に雀がぬくくと (文化八年)

出典 七番日記(文化8・12)

恥かしやまかり出てとる江戸のとし (文政二年)

出典 八番日記(文政2・12)・おらが春・発句鈔追加・文政二年十二月十五日付文路あて書簡

⑩ 八番日記、「はづかしや罷出て取江戸の年」。おらが春、前書「かも川をワたらじとちかひし人さへあるに、ひと度籠りし深山を下りて、しら髪つむりを吹れツゝ名利の地に交る」。中七以下「はづかしやまかり出てとる」。発句鈔追加、前書「加茂川をわたらじとちぎりし人さへあるに心ならずも一夏こもりし太山を出て白髪つむりを吹れツゝ名利の地にまじる」。「恥しや又も来てとる江戸の年」として、「一本心ならずも太山を出て名利の地に交るトバカリアリ」恥しやまかり出てとる江戸の年』と添書。文路あて書簡、前書「かこ川わたらじとちかひし人もあるに、一度こもりし深山を下りて、名利の地にまじはる」。句は表記とも「おらが春」に同じ。八番日記(文政2・11)、「むづかしや又も来てとる江戸の年」。だん袋、前書「心ならずも太山を出て、名利の地ニまじはる」として、上五、中七「はづかしや又も来てとる」。

鳥さへ年とる松は持にけり (文政三年)

出典 八番日記(文政3・12)

㊦ 上五、中七「鳥(へ)さい年とる森は」。

日本にとしとるのがらくだかな (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・12)

㊦ 自筆句集、上五「日本の」。座五「らくだ哉」。発句鈔追加、前書「あらんだ国渡り大馬」。上五「日本の」、座五「駱駝かな」。文政七年十一月十日付文路あて簡書、「江戸へ大馬下り候由、御覽被成候哉」として、上五「日本の」、座五「らくだ哉」。文政七年十一月二十九日付春耕あて簡書、前書「おらんだ渡大馬」。上五「日本の」、座五「らくだ哉」。

厄 払

一文で厄払けり門の月 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・12)・文政元年十二月二十二日付文路あて書簡

㊦ 七番日記、中七「厄(厄)払けり」。

狩

狩小屋の夜明也けり犬の鈴 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・8)

㊦ 前書「盧(命)命」

目出度さの麦よ畑よ御鷹狩 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・10)

鷹がりや麦の旭を袖にして(文化二年)

出典 文化句帳(文化2・10)

網 代

親のおやの打し杭也あじろ小屋 (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・10)

朋友有信

網代守爰にとゑへんく哉 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・閏8)・自筆句集・希杖本句集・文政版発句集

⑥ 自筆句集、前書ナシ、「網代守て爰にえへんえへん哉」。文政版発句集、前書ナシ。

年 木

三四本流れよりたるとし木哉 (文化三年)

出典 文化句帳 (文化3・8)

⑦ 中七「流れ寄りたる」。

寝てみるや元日焚の柴一把 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・12)

⑧ 希杖本句集、「寝て見るや元日焼柴一わ」。

麦蒔く

麦蒔て松の下はく御寺哉 (文化三年)

出典 文化句帳 (文化3・10)

一掴み麦を蒔たり堂の隅 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・9月、10月の部)

頭 巾

不二風真ともにかかる頭巾哉 (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・11)

⑩ 中七「真ともにかゝる」。

諸大夫にすれ違ふたる頭巾哉 (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・10)

頭巾きて見てもかくれぬ白髪哉 (文政六年)

出典 文政句帳 (文政6・10)

足袋

朔日の拇出る足袋で候 (文化七年)

出典 文化三―八年句日記写 (文化7)

ふとんきるや翌のわらぢを枕元 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・閏11)

⑪ 中七「翌のわらぢを」。この句、次の「蒲団」に入るべきもの。

皮足袋も位ではくや本町店 (文政七年)

出典 文政句帳 (文政7・10)

⑫ 文政句帳、中七「位で知れるや」(別案)。

蒲団

大坂八軒家

舟が着て候とはぐふとん哉

〔文政版
一茶発句集〕

出典 自筆句集・文政版発句集・嘉永版発句集

② 嘉永版発句集、座五「ふとんかな」。七番日記（文化10・閏11）、中七「又候（と）ぞろめくる」。

雪車

そり引や家根から投るとどけ状 （文政四年）

出典 八番日記（文化4・10）

② 八番日記、座五「とどけ状」。だん袋、前書「北陸道」。「雪車引や家根から呼るとどけ状」。文政四年十二月十九日付ト英あて簡書、前書「北陸道」。「雪車引や家根から呼る届状」。自筆句集、「そり引きや家根「から」おとすとどけ状」。嘉永版発句集、「雪舟引や屋根から呼る届状」。発句鈔追加、前書「北陸道」。「雪車曳や屋根からよばるとどけ状」。

冬籠

親も斯う見られし山や冬籠 （享和三年）

出典 享和句帳（享和3・10）

② 上五「親も斯」。

冬籠けしきに並ぶ小藪哉 （文化十年）

出典 七番日記（文化10・9月、10月の部）

冬籠悪もの喰が（つ）のりけり （文政二年）

出典 八番日記（文政4・11）・ほまち畑（文政6・10成就、一茶・文虎両吟歌仙）・自筆句集・文政版発句集・嘉永版

発句集

② 八番日記、中七「あく物（つ）ぐいの」。自筆句集、中七以下「悪物喰の」。ほまち畑、前書「小人閑居成不善」。上五・中七「冬ごもり悪もの喰の」。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「小人閑居成不善」。中七以下「悪もの喰の（つ）のりけり」。風間本八番日記（文政2・12）、「冬籠り悪「もの」喰が上りけり」「冬ごもりいか物喰を習（つ）へけり」。梅塵本八番日記（文

政2)、中七以下「あく物喰が上手なり」。梅塵本八番日記(文政4)、中七「あくもの喰の」。おらが春、前書「小人閑居成不善」。「冬籠り悪く物喰を習けり」。

鼻先に菜も青ませて冬籠 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・11)

火鉢

暮るる迄日のさしにけり土火鉢 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

⑤ 上五「暮るゝ迄」。

けふもくく竹見る火桶哉 (文化四年)

出典 文化句帳(文化4・11)

⑥ 文化四年十二月八日付可候あて書簡、上五・中七「けふもくく竹に見とるゝ」。

炬燵

思ふ人の側へ割込む巨燵哉 (寛政五年)

出典 寛政句帳(寛政5)

⑦ 句の上白に「思恋」。

南天よ巨燵やぐらよ淋しさよ (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

炬燵より見ればぞ不二もふじの山 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・12)

雀子炬燵弁慶是に有 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・11)

大名は濡れて通るを炬燵かな (文化十四年)

出典 七番日記 (文化14・11)

㊦ 中七以下「濡れ〔て〕通るを巨燵哉」。

旅

斯う寝るも我火燵ではなかりけり (文政版一茶発句集)

出典 花の跡(蟹守撰、文政1)・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 花の跡、前書「旅中」。嘉永版発句集、座五「無けり」。

湯 婆

先よしと足でおし出すたんぼ哉 (文化十四年)

出典 七番日記 (文化14・11)

我恋は夜ごとくくの湯婆哉 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・10)

㊦ 中七「夜たぐくの」。

炭

ほちくくと椿咲けり岩けぶり (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・11)

㊦ 上五「ほちく」と。

鳴鶏のはら／＼時の炭水哉 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

赤い実は何の実かそもはかりずみ (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

㊦ 享和句帳(3・11)、中七以下「何のみかそもかれ木立」。

炭もはや俵の底ぞ三日の月 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

㊦ 座五「三ヶの月」。

おもしろや隣もおなじはかり炭 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・10)

鶯が先とまつたぞ炭俵 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・11)

分てやる隣もあれなおこり炭 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・10)・句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集

一茶坊に過たるものや炭一俵 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・10)・自筆句集

㊦ 自筆句集、上五「一茶坊」。

朝晴にばち／＼炭のきげん哉 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・11)・句稿消息・自筆句集・文政版発句集・嘉永版発句集

⑤ 七番日記、上五「(半濁ママ)ばちく炭の」。嘉永版発句集、座五「機嫌かな」。

今行し爺が炭竈でありしよな (文化十年)

出典 七番日記(文化10・11)

すりこ木も炭打程に老にけり (文化十年)

出典 七番日記(文化10・11)・自筆句集

おこり炭峰の松風通ひけり (文化十年)

出典 七番日記(文化10・10)

炭竈も必隣ありにけり (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・10)

炭の火に月落烏啼にけり (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・11)・自筆句集・文政版発句集・嘉永版発句集

榓

榓の火や糸取窓の影ぼうし (寛政四年)

出典 寛政句帳(寛政5)

榓の火や吉次吉六武さし坊 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・10)

⑥ 自筆句集、中七以下「吉次喜三太武蔵坊」。

唐崎の雨をうしろに榓火哉 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・10)

櫓の火にせなか向けり最明寺 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・10)

㊦ 自筆句集、中七「うしろ向けけり」。文政版発句集、中七「うしろむけけり」。嘉永版発句集、「後ろむけけり」。

子宝がきやらく笑ふ櫓火哉 (文政二年)

出典 おらが春

埋 火

埋火に桂の鷗聞へけり (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・10)・稿本発句題叢・嘉永版発句集

㊦ 嘉永版発句集、前書「檻木原に泊りて」。

埋火や白湯もちんく夜の雨 (文政七年)

出典 七番日記(文政7・9)・ほまち畑

㊦ ほまち畑、前書「影法師」。中七「素湯もちんく」(文政9・11成就一茶・文虎両吟歌仙)。

寒 声

木母寺や常念仏も寒の声 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・11)

掛 菜

かけそめし日からおとろふかけ菜哉 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

蕎麦湯

そりや寝鐘そりやそば湯ぞよく (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・8)

鷹

鷹来るや蝦夷を去事一百里 (寛政四年)

出典 寛政句帳 (寛政4)

笹鳴

朝くくにうぐひすも鳴けいこ哉 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・12)

⑩ 中七「うぐひすと鳴」。

笹鳴やずいさいせいびの世なり迎 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・12)

⑪ 中七以下「ズイサイセイビの世なりとて」。

三十三歳

夕雨を鳴出したるみそさざい (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・11)

⑫ 座五「みそざざい」。

みそさざいちつといふても日の暮る (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・11)・稿本発句題叢

⑬ 文化句帳・発句題叢、上五「みそざざい」。文政版発句集・嘉永版発句集、「みそざざいちつといふても日が暮る」。

十月の十日生かみそさざい (文化九年)

出典 七番日記 (文化9・11)

㊟ 座五「みそさざい」。

柴けぶり立るぞ遊べみそさざい (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・10)

㊟ 座五「みそさざい」。

連のない旅は気ままかみそさざい (文化十四年)

出典 七番日記 (文化14・11)

㊟ 中七以下「旅は気まゝかみそさざい」。

みそさざい犬の通ぢくぐりけり (文化十四年)

出典 七番日記 (文化14・11)

㊟ 上五「みそさざい」。座五「くぐりけり」。

千鳥

干菜切音も須磨也鳴ち鳥 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・10)

象潟の欠を擱んで鳴千鳥 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・9月、10月の部)・句稿消息・随斎筆紀・あつまつり・自筆句集・文政版発句集・嘉永版発

句集

㊟ 七番日記、前書「地底に入」。中七「欠をかぞへて」「欠を擱んで」「欠をすがりて」と併記。句稿消息、前書「さぎの

年の大なるに、鳥海山は崩れて海を埋め、干満寺はゆり込で名残だになし、さばかりの風色いよ／＼うらむがごとく也」。中七「欠」にすがつて」「(欠)をかぞへて」「(欠)を擱んで」と記し、前二者を朱にて消す。随斎筆紀、中七以下「欠を擱んで鳴く千鳥」。あとまつり、前書「さきのとしの大なひに、鳥海山はくづれて海を埋め、甘満寺はゆりこみ、沼とかはりぬ。さすがの名どころも、まことにうらむがごとくなりけり」。上五・中七「象がたの欠を擱で」。自筆句集、前書「覽古」。中七「欠をつかんで」。文政版発句集、前書「さきのとしの大なひに、鳥海山はくづれて海を埋め、甘満寺はゆりこみ、沼とかはりぬ。さすがの名どころも事ごとくにうらむがごとくなりけり」。上五・中七「象がたの欠を擱で」。嘉永版発句集、前書「さきつとしの大なひに、鳥海山はくづれて海埋め、甘満寺はゆりこみ、沼田とかはりぬ。さすがの名どころも事ごとくにうらむが如くなりけり」。中七「欠を擱で」。

木母寺の雪隠からも千鳥哉 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・11)・自筆句集

忍べとの印の竿や鳴千鳥 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・11)

鴨

湯どうふの名所と申せ鴨の鳴 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・11)

古利根や鴨の鳴夜の酒の味 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・11)

⑤ 上五「古根利や」。

水鳥

君が世や舟にも馴てうき寝どり (寛政五年)

出典 寛政句帳(寛政5)

⑤ 座五「うき寝鳥」。

水鳥のどちらへも行はず暮にけり (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

水鳥の往こなしたり小梅筋 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・10)

鰻

鰻すするうしろは伊豆の岬かな (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・11)

⑥ 上五「鰻すする」。

見れば見る程仏頂面の鰻哉 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・11)

五十にして鰻の味をしる夜かな(嘉永版
一茶発句集)

出典 稿本発句題叢(文政3)・嘉永版発句集

⑦ 上五「五十にて」。発句鈔追加、中七以下「鰻の喰味を知夜哉」。

海鼠

ほのくくと明石が浦のなまこ哉 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・7)

⑧ 発句鈔追加、中七以下「明石の浦の生海鼠哉」。

枯草

かれ葱かなぐり捨もせざりけり (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・10)

㊦ 発句鈔追加、上五「枯葎」。梅塵抄録連句集、一茶・双樹両吟歌仙「秋葎」。

鶏頭が立往生をしたりけり (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・10)

㊦ 七番日記 (文化13・閏8、12||重出)、上五「鶏頭の」。

人をさす草もへたく枯にけり (文化十四年)

出典 七番日記 (文化14・9)

枯芦

枯芦や身程にそつと三日の月 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・10)

㊦ 座五「三ヶの月」。

枯芒

此やうに枯てもさはぐ芒哉 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・10)

大根

大根引一本づつに雲を見る (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・10)

㊦ 中七「一本づゝに」。

我庵の冬は来りけり瘦大根 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

大根や一つ抜てはつくば山 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

㊦ 前書「鵲巢」。

大日枝に牛つなぎけり大根引 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・10)

㊦ 中七「牛ツナギけり」。

風花の松はぬれけり大根引 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・10)

君が代の下総大根引にけり (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・10)

花咲けと一本残す大根哉 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・10)

㊦ 中七「一本残る」。

大根引大根で道を教へけり (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・12)・自筆句集・文政版発句集・嘉永版発句集

蕪

おく霜の一味付し蕪かな (文政三年)

出典 八番日記(文政3・11)・自筆句集

葱

煙して葱畠の長閑さよ (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・10)

明暮に葱四五本や門の口 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・10)

冬木

売家につんと立たる冬木哉 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

㊦ 上五「売家に」「からめしに」の二案併記。

ぬく／＼と一人立たる冬木哉 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・10)

枯木

町中に冬がれ榎立ちけり (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・11)

枯柳

片びなたえどの柳もかれにけり (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・10)

㊦ 中七「エドの柳も」。

冬木立

山寺に豆麩引く也冬木立（文政五年）

出典 文政句帳（文政5・8）

㊦ 井泉水「豆麩」に「まめふ」とルビ。

木の葉

ちる木の葉渡世念仏通りけり（文化七年）

出典 七番日記（文化7・10）

㊦ 上五「ちる木葉」。

檜の葉の朝から散るやとうふぶね（文政元年）

出典 文化句帳（文化1・9）・稿本発句題叢

㊦ 文化句帳、上五「檜「の」葉の」。座五「とうふぶね」。発句題叢、中七以下「朝からちるや豆腐槽」。発句鈔追加、中七以下「朝からちるや豆腐桶」。嘉永版発句集、座五「豆ふ桶」。

立砂十三回忌、墓前にて

ちる木の葉則去る夕かな（文化八年）

出典 我春集（文化8）

㊦ 中七「則去ル」。「墓の前にて手向心の十三句也」とある一句。

ちる木の葉社の錠の錆しよな（文化十年）

出典 七番日記（文化10・10）

金比羅やおんひらくとちる木の葉 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・11)

㊦ 上五「金比良(羅)や」。座五「ちる木葉」。

役馬のひとり帰るやちる木の葉 (しだら)

出典 希杖本句集

落葉

落葉して日向に立たる榎哉 (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・8)

㊦ 前書「有杖」(ありていたる)。

吉原のうしろ見らるるおち葉哉 (文化七年)

出典 文化三十八年句日記写 (文化7)

㊦ 中七「うしろ見らるる」。

おち葉して憎い鳥はなかりけり (文化九年)

出典 七番日記 (文化9・11)

焚ほどは風がくれたるおち葉哉 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・10)・発句鈔追加

㊦ 発句鈔追加、前書「独庵」。上五「焚程は」。座五「落葉哉」。

槽をうつ向ておくおち葉哉 (文化十四年)

出典 七番日記 (文化14・11)

㊦ 座五「おち葉〔哉〕」。

おち葉して親孝行の烏かな (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・12)

㊧ 中七以下「親孝行の烏哉」。

落葉して三月ごろの垣根哉 (文政版
一茶発句集)

出典 真蹟短冊(一茶真蹟集所収)・文政版発句集・嘉永版発句集

㊨ 真蹟「おち葉して三月ごろのかきね哉」。嘉永版発句集、中七以下「三月頃の垣根かな」。

鶯の口すぎに来る落葉かな (嘉永版
一茶発句集)

出典 九日集(一具撰、文政8)・嘉永版発句集

冬 枯

冬枯やあらしの中の御神燈 (寛政五年)

出典 寛政句帳(寛政5)

冬枯や松火とがむる人の声 (寛政五年)

出典 寛政句帳(寛政5)

冬枯や飛く／＼に菜のこぼれ種 (寛政五年)

出典 寛政句帳(寛政5)

栽込や冬枯るる夜の雨をあらみ (寛政五年)

出典 寛政句帳(寛政5)

㊩ 中七「冬枯るる夜の」。

下京や紙打音も冬枯るる (文化二年)

出典 文化句帳 (文化2・10)

② 前書「随斎にて」。座五「冬枯る」と。

月よ闇よ吉原行も冬枯るる (文化二年)

出典 文化句帳 (文化2・11)

② 座五「冬枯る」と。

冬枯や親に放れし馬の顔 (文化二年)

出典 文化句帳 (文化2・10)

② 前書「小金原」。

冬枯や垣にゆひ込むつくば山 (文化十年)

出典 七番日記 (文化9・6)・句稿消息

② 句稿消息、上五「冬がれや」。

冬枯や神馬の漆はげて立 (文政二年)

出典 八番日記 (文政2・9)

霜 枯

霜がれや東海道の這入口 (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・10)

霜がれや勸化法度の藪の宿 (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・10)

⑨ 中七「^(勸)飲化法度の」。〃

霜がれや木辻の鹿のほくくくと (文化八年)

出典 七番日記 (文化8・10)

霜がれの中を元三大師哉 (文化八年)

出典 七番日記 (文化8・10)

霜がれや路通乞食に笠かさん (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・10)

霜がれや新吉原も小藪並 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・10)・志多良・句稿消息・稿本発句題叢・文政版発句集・嘉永版発句集

霜がれや壁のうしろは越後山 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・閏11)

霜がれや烟豊かな三軒家 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・10)

霜がれて碓がたりく哉 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・12)・自筆句集

霜がれの笠にて候と出かけたたり (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・11)

霜がれや米くれろ迎鳴雀 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・12)

坂本

㊦ 前書「随斎旧迹」。中七「米くれろとて」。

霜がれてせうじの蠅のかはゆさよ (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・11)

㊧ 前書ナシ。座五「カハユさよ」。

霜がれや庵の門へも夜番札 (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・10)・自筆句集・希杖本句集

㊨ 自筆句集、前書「市中住居」。

人足も霜がれ時や王子みち (文政二年)

出典 八番日記(文政2・10)・嘉永版発句集

霜がれやどなたの顔も思案橋 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・10)

霜がれや胡粉の兀し土団子 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・10)・発句鈔追加

㊩ 八番日記、上五「霜がれ〔や〕」。発句鈔追加、前書「瘡守稻荷」。上五「霜枯や」。

霜がれやおれを見かけて鉦たたく (文政二年)

出典 八番日記(文政2・10)・嘉永版発句集

㊪ 八番日記、前書「仲仙道^(中)」。上五「霜がれ〔や〕」。座五「鉦たたく」。嘉永版発句集、「前書「中仙道」。中七以下「おれを見掛けて鉦叩く」。

としどしに霜がれにけりいろは茶や (文政三年)

出典 八番日記(文政3・10)

霜がれや鍋の炭かく小傾城 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・11)・自筆句集・文政版発句集・嘉永版発句集

② 梅塵本八番日記、前書「追分」。自筆句集、前書「追分」。中七「鍋」の「の」すみかく。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「追分」。中七「鍋のすみかく」。

水仙

家ありてそして水仙島かな (文化十年)

出典 七番日記(文化10・10)

水仙や背中にあてる上総山 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・10)

③ 中七「せ中にあてる」。

水仙の花の御湊誕生寺 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・10)

石路の花

御地獄のおさむいなりや石路の花 (文化八年)

出典 七番日記(文化8・11)

④ 上五「御地蔵の」。座五「石落花」。

ちまちまとした海もちぬ石路の花 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・11)

㊦ 上五「ちま／＼と」。

山茶花

山茶咲や抱て左甚五郎 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・10)

茶の花

ぼつ／＼と花のつもりの茶の木哉 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・10)

茶の花に隠んぼする雀哉 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・10)

茶の花や達磨ぬる手のとも日和 (文化十二年)

出典 七番日記 (文化12・10)

枇杷の花

びは咲や放後架も利久がた (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・閏11)

㊦ 上五「ビハ咲くや」

びは咲や世をうち山へ咄し道 (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・10)

㊦ 上五・中七「ビハ咲や世」を「うち山へ」。自筆句集、上五・中七「ビハ咲や世をうち山の」。

月花や四十九年のむだ歩き (文化八年)

出典 七番日記(文化8・閏2)・我春集・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 文政版発句集・嘉永版発句集、座五「むだ歩行」。

天下泰平

松陰に寝てくふ六十余州かな (文化九年)

出典 七番日記(文化9・2)・株番・杖の竹・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 七番日記、前書ナシ。中七以下「寝てくふ六十ヨ州かな」。株番(重出)、前書「賀治世」。中七以下「寝てくふ六十ヨ州哉」。杖の竹、前書「国家安全」。「松かげに」「六十余州哉」。文政版発句集、前書「天下泰平」。中七以下「寝て喰ふ六十余州哉」。嘉永版発句集、前書「天下泰平」。中七以下「寝て喰ふ六十余州かな」。

大竹の末練に折て居たりけり (文化九年)

出典 七番日記(文化9・2)

㊤ 上五「大竹」の」。

亀どののいくつのとしぞ不二の山 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・2)・株番・稿本発句題叢・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 七番日記、上五「亀どのの」。「株番、上五「亀どのの」」。座五「富士の山」。発句題叢、前書「琵琶湖」。上五「亀どのの」。「座五「不二山」。文政版発句集、前書「琵琶湖」。上五「亀どのの」。「座五「富士の山」。嘉永版発句集、前書「琵琶湖」。上五「亀殿の」。

松島や生れながらの峰の松 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・2)

㊦ 中七「生ながらの」。

亡母や海見る度に見る度に (文化九年)

出典 七番日記(文化9・3)

思ふまじ見まじとすれど我家かな (文政二年)

出典 おらが春・発句鈔追加

㊦ おらが春、座五「我家哉」。発句鈔追加、おらが春第四話を引いて、座五「我家哉」。八番日記(文政2・1)、「思ふまじ見まじかすめよおれが家」「もふ見まじく^(う)とすれど我家哉」。

掃溜に鶴の下りけり和歌の浦 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・9)

㊦ 上五「掃溜^(溜)に」。梅塵本八番日記、上五「掃溜に」。文政版発句集・嘉永版発句集、上五「掃溜へ」。

むさしのや水ッ溜りのふじの山 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・6)

㊦ 上五・中七「むさしの「や」水溜りの」。